

自己矛盾の苦悩

——『ネザー・ワールド』を中心に——

牧嶋 秀之

I

ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) は、ギッシング (George Gissing, 1857-1903) を評して「不完全な小説家」と述べている。¹⁾ これはギッシングの小説の中には彼自身の体験があまりにも生そのまま描かれているという点を指して言ったものである。ギッシングは、作家としてデビューして以来、ロンドンの下層労働者を題材にした小説を連続して発表し、たしかにそれらは彼の実体験に基づいたものである。しかしその系統の作品の第六作目にあたる『ネザー・ワールド』(The Nether World, 1889) は小説としての完成度が高いというのが一般的評価である。²⁾ そしてこの作品でギッシングは自分の体験を芸術作品にまで高めたと言われている。

ギッシングの窮乏生活の体験はよく知られている。彼は『ネザー・ワールド』を書き上げるまで、生活費に余裕のできたことはほとんどなかった。粗末な服を身に付け、とぼしい食事をとりながら、ロンドンの貧民街のうす暗い部屋で生きるために執筆を続けていた。心の慰めといえばギリシャ・ラテンの古典である。少年時代から非常に秀才で、オウエンズ・カレッジ (マンチェスター大学の前身) に奨学金を得て入学、特に古典では常に抜群の成績で、将来はオックスフォードかケンブリッジの教授にと、周囲から期待されるほどであった彼は、いくら貧しくても古典の本は手放さず、どんなに疲れていても夜はそれらの本を読んだ。³⁾

学生時代、彼がある売春婦を更生させようとして級友の物を盗み、それが発覚して逮捕され、投獄されたのは18歳のときである。二年あまりアメリカを放浪した後、ロンドンに戻ったが、貧しい孤独な生活は、彼を相当追い詰めたようだ。彼は弟アルジャーノン (Algernon) に宛てた

1878年7月24日の書簡の中で「私は希望をすっかり捨ててしまった。前途には飢餓と窮乏があるのみだ」⁹⁾と述べている。

そのような状況の中で書かれた『ネザー・ワールド』は、当時の労働者階級の日常が客観的に描かれているのではない。描かれているのはギッシングの目というフィルターを通して見た労働者の世界である。その内容は、主に貧乏のどん底にある主人公シドニー・カークウッド (Sidney Kirkwood) のつらい生活の描写であり、彼の苦しみがこの小説全編をおおい、息苦しいほどである。その苦しみのもととはといえば、明らかに経済的窮乏である。しかし「金がないから」というだけでは彼の苦悩は説明しきれない。他の貧しい人物たちの中には、シドニーに比べ、ずっと気楽に暮らしている者もいるからだ。

この小論では、『ネザー・ワールド』におけるシドニー像を明確にした上で、彼の苦しみの本質について考えてみたい。

II

まず明らかにしておきたいのは、シドニーは労働者階級の人間でありながら典型的な労働者ではないということだ。彼は普通の労働者たちとは少し違った生き方をしている青年なのだ。

その特徴をあげると、まず彼が芸術を愛好していることを指摘できる。シドニーは幼いころから絵が得意で、将来は製図工になり、できれば風景画家になりたいという夢を持っていた。しかし現実には画家になるのは容易なことではない。シドニーは貧困のため絵画学校に通うことができず、また画廊の絵を見て自分には才能がないことを悟り、画家になることをあきらめる(6章58)⁹⁾。しかし、夢は破れはしたが、彼は細々と自分の楽しみのために絵を描き続け、自宅の壁にそれを掛けている。つまり彼は、常に芸術を求める心を持って生きているのであり、それが一般の労働者と彼とをはっきりと分けている。

シドニーの絵画に対する情熱は、『ヘンリー・ライクロフトの私記』(*The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903、以下『ライクロフト』と略記)で、

ライクロフトがイギリスの風景画に対して特別の興味を持っていることを思い出させる。そこには、「イギリスの風景画家なら、どんなつまらない画家でも私は愛し、尊敬する」と書かれている。⁶⁾ イギリス風景画に対するギッシングの思い入れの強さがよくわかるところであり、それがシドニーの中にも表されているのであろう。

また、『ネザー・ワールド』の中で、語り手が音楽の効用を説くところがある。

さて、社会悪の解決策は誰もが持っているにちがいないが、私の案をお話したい。大衆を人間らしくするのに、二つのことが必要である。実に単純な二つのことが考えられる。まず第一は、経済状態をすっかり変えなければならない。誰でも簡単だと思う、最初の一步だ。さて、その次は、新しい状況の中で、いつも音楽を聴かせて良い影響を与えるのだ。この処方箋は名案ではないだろうか。私はまじめに冗談を言っているのだ。(12章 109)

おそらくギッシング自身が相当な音楽愛好家であり、音楽によって心がなごむのは彼の実体験だったのだろう。⁷⁾ それで大衆に「いつも音楽を聴かせて良い影響を与え」ればよい、と「まじめに冗談」を言ったのだと思われる。

ギッシングが人生における芸術の持つ意味の大きさを信じていたことは間違いないだろう。『ライクロフト』には、「音楽と絵画は私にとっては常に大きな意味を持ち続けてきた」と書いてあり、⁸⁾ また芸術の定義として「人生に対する情熱の、快かつ永続的な表現である」と述べられている。⁹⁾ 『ネザー・ワールド』では、シドニーが下層階級であるという点に注目したい。上流、中流であって生活にゆとりがあるならまだしも、生きていくためにあくせくしなければならない境遇にありながら、彼が芸術を愛している点に意味があると思われる。

シドニーがほかの労働者たちと異なるもう一つの点は、他人に対する優しさである。『ネザー・ワールド』で描かれる下層階級の人々は非常に貧しく、みな自分が生活していきただけで精一杯で、通常他人のことまで

考える余裕がない。そのためいさかいが絶えず、夫婦間、あるいは友人同士の暴力場面がしばしば登場する。しかしシドニーは、貧困に苦しんではいともつねに他人に対する思いやりを失わない。

この小説の冒頭近くでは、ジェイン (Jane) がシドニーの優しさに感激するさまが描かれている。優しさといっても他愛のないことである。暖かい言葉をかけたり、雨の中を歩くときに上着をかけてあげるという程度のことだ。それでも、自分を人間扱いしてくれたということで彼女はとてうれしく思い、シドニーと会うのを楽しみにする。

また、知りあいが困っていると聞けば、シドニーはすぐに出かけて行って、親身に相談にのる。たとえば友人ジョン・ヒューイット (John Hewett) は彼と話しているうちに、貧困のためにささくれだった気持ちが次第になごんでくる (21章)。病弱なヒューイット夫人も死ぬまでシドニーを頼りにして、しきりに話し相手として彼を求める。

やがてシドニーは、なかば同情心からヒューイットの娘クレアラ (Clara) と結婚する。彼女は女優になる夢が破れて失意の中にあり、また競争相手の女優から顔に劇薬をかけられたためつねにベールをかぶっている。働きに出るどころか、外出さえめったにしない。そんな彼女にとって、本当に必要なのは金である。しかし、シドニーは収入が少ないため金を与えることはできない。その代わり、言葉なら与えることができる。クレアラはうんざりしているのだが、シドニーは彼女を励まし続ける。もちろん彼女にとっても、くたくたになるまで働いた後で彼女に言葉をかけるのは、精神的、肉体的にきついことなのだが、彼はやめない。シドニーはまるでそれが彼の存在理由であるかのように励まし続ける。クレアラはそんな彼に半分愛想を尽かしながら聞いているが、やがて少しずつ心を動かされていくのだ。

シドニーは、同居しているクレアラの弟や妹にも優しさを示す。彼らが窓ガラスをこわしたため食費を削らなければならなくなったときにも、おだやかに、ユーモラスに論ずだけである。彼は決して乱暴な言葉で押さえつけることはしない。子供たちの父親ヒューイットは、そんなシドニーに対し「優しすぎる、甘やかしている」と文句を言うが、彼の言い分はこうだ。「気にすることはない。悪を打ち破れないからといって、悪

に味方することはない」(39章372)。

このようなシドニーの姿を見ると、彼はまるで聖人のように思えるかもしれないが、実際はそうではない。彼は腹を立てれば相手に皮肉を言うし、愛しているクレアラの気持ちを十分理解する力もない。クレアラの行動に対して説教するシドニーは、彼女に「私について何か分かったような顔をするときは、いつも大はずれだ」(4章32)とまで言われる。

それではなぜ彼はこれほど人に優しくするのだろうか。それは、そうすることによって彼は自分が一般の労働者とは異なる人間であることを自覚することができるからである。彼はクレアラに言う。

互いに優しくなろうよ。生活が苦しいために、人間まで卑しくなる、みじめな連中のようになるのはよそう。僕たちにはプライドがあるんだから、そうはなれないはずだ。僕たちは考えられるし、考えることを表現できる。互いに思うこと、感じることを話し合うことができる。落ち込むのはやめよう！(39章379)

このように、シドニーは芸術を愛する点、優しさを持っている点で一般の労働者とは一線を画している。そしてそのことを誇りに思っているのである。

ところが一方で彼は、自分は労働者階級の人間にすぎないという自覚もある。それは悲しい自覚であるが、彼は労働者階級から飛び出そうとは思っていない。努めて労働者の一員になろうとしている。彼はなにかというと「我々は労働者階級だ」と言って、身分不相応なことは避けようとする。現実の生活を受け入れることが、彼にとって「自分の希望のすべてに対する最終的な答え」(6章58)であったのだ。

また彼は他人に対しても身分相応であることを求める。たとえばヒューイットが娘のクレアラのためにピアノを借りたとき「俺たちは労働者階級だ」と一生懸命叫んでやめさせようとする。このような、身分不相応なことは避けるという態度をとっていれば、ヒューイットのように理想と現実の間で苦しむことはないかもしれない。しかし現実を受け入れることは、希望を捨て、自分の可能性を狭めることにつながる。シドニー

の言動に元気がなく彼の生活が重苦しく暗い一因は、現実を受け入れることによって希望を次々に捨てていく態度にあるのではないだろうか。

風景画家になることをあきらめたシドニーは、

絶望し、自分は職人で、それ以上の者にはけっしてなれぬという現実を認識した。

はかない望みは消え失せた。…意識して、現実的な人間になろうとつとめ、あるがままの生活を受け入れようとした。ヒューイットを苦しみもだえさせる、あんな考え方（労働者革命を目指すこと＝筆者）は大間違いだと避けようとした。人生に大きな楽しみを期待するとは、一体自分は何様なのだ。「下層階級だ。労働者階級だ」と苦り切って友人に言った。そう言えば自分の憧憬のすべてを抑えられると思った。（6章58）

実際はそのようにうまく自分の感情を抑えられるわけではない。「憎悪や羨望や、有害だから抑えようとした感情のすべて」（6章59）が心の中で騒ぐ。しかもそれを打ち明けることのできる家族や友人を彼は持たないのだ。

スラム街から飛び出そうとして、勇敢に行動を起こした唯一の人間はクレアラである。シドニーはつねにそのようなクレアラを批判し、彼女に忠告を与えてきたが彼女は耳を貸さない。彼女は女優への階段を上り始めたところで、結局夢破れるが、心は案外さばさばしている。自分の身に危害を加えた女に対してもそれほど恨みは感じていない。生まれた階級の低さを嘆くだけである。もしこれが、シドニーの忠告を聞き入れて、女優になるための努力を最初から放棄していたら、そのような心境になれたであろうか。

シドニーの生活の重苦しさは、ギッシングの二年後の作『新三文文士街』（*New Grub Street*, 1891）で描かれる世界と比べてみても際立っている。『新三文文士街』の作中人物たちもシドニーと同じように貧しいが、彼らは生きるエネルギーを持っている。主人公のリアードン（Reardon）は、思うように小説が書けず、妻に去られ、貧苦の中で病に倒れ、死ん

でいくが、決してみじめな生涯ではなかった。それは、彼が最後まで現実と妥協することなく夢を持ち続けたからではないだろうか。

シドニーの人生における苦悩の根源の一つは、一般労働者とは違うことに誇りを持ちながら、同時にその労働者になりきろうと努力するとう、相反する意志に引き裂かれているところにあると言えるだろう。

Ⅲ

シドニーは、自分を労働者階級の一員だと考えるだけでなく、労働者と連帯して、生活を向上させなければならないと考えている。彼は、「とにかくこの間違っただ世の中をなんとかしたい」という考えを持っているのだ。語り手はこれを「若者らしい革新主義」(juvenile Radicalism)と呼んでいる(6章53)。

シドニーは純粹な若者らしく、友人のヒューイットやマイケル・スノードン(Michael Snowdon)の理想主義的な生き方、考え方に大いに共感を覚える。たとえばヒューイットは、貧しさのために盗みを犯した娘のことを新聞で読み、義憤にかられて彼女と衝動的に結婚するが(6章)、彼女のことを高く評価し誇りに思うヒューイットの言葉を聞くと、シドニーの胸は喜びで熱くなるのだ。これはギッシングが盗みまでして売春婦を更生させようとした事実を連想させる。また彼は、スノードンのように自分を犠牲にしてでも社会福祉に全財産を使いたいと考える人物を高く評価している。

彼らの影響を受けて、徐々にシドニーは社会の矛盾に目覚めてゆく。労働者たちは社会の構造上貧しい状況に置かれているのであり、現実の社会制度が彼らの向上心を奪っているという考えを、彼は持つようになる。

シドニーのような労働者観を持たない人物は、慈善活動をしても失敗する。ミス・ラント(Miss Lant)は、彼女に反感を持つ労働者たちが彼女の与えたスープを床にぶちまけると腹を立て、「これが連中の感謝のしかたなのよ！」(28章252)と叫ぶ。このようなミス・ラントは語り手につぎのように厳しく糾弾される。

感謝だって。感謝を期待してこの仕事を始めたのか。貧民街シューターズ・ガーデンズに住むこの人たちが、貧乏で、ぼんやりして、病気で、全体的に言って人間らしきなんて期待できないのがわからないのか。どん底の世界が上層部に属する人々のせいでどんなものになったのか、まだわからないのか。感謝だって。いや、この不幸な、飢え死にしかけた女たちがやって来て、あなたたちを引き裂かずにすんでいるのをありがたく思いなさい。(28章 252)

シドニーの「若者らしい革新主義」的な生き方は、社会全体の急進的改革を求めるのではなく、隣人に目を向ける。身近なところから始める社会改革だ。彼は妻のクレアラに言う。

貧しい者同士、ともに立ち上がり、助け合わなくてはいけないよ。むこうはそのつもりであろうとなかろうと、いつもいつも僕たちを押しつぶそうとする金持ち連中に対して戦わなければいけない。あいつらは生活を楽しんでいる。そうだ、僕は、あの連中が僕を絶望させようとするのに対し、戦いを挑むのを楽しみにしよう。(39章 378-79)

彼にとって貧しい者たちの連帯が富裕階級に対する戦いなのだ。

しかし、シドニーは、自分の周囲にいる労働者階級の人々に対しては誠心誠意力を尽くすが、決して労働者全体に愛情を持っているわけではない。また、彼らに対して甘い幻想も持っていない。彼らの向上心や連帯感には期待していないし、援助を糧に各自が努力するだろうとは考えていない。たとえば、貧民の救済に励むジェインに「価値のない連中に親切にしても無駄だよ」(28章 257) と彼は言う。ジェインは、できるだけのことをしてあげて、その人たちなりに気持ちよく暮らしてほしいのだと言うが、それを聞いて彼は、ジェインのようなかわいい、やさしい娘が、青春をむざむざ浪費している、と心の中で激しい怒りをおぼえるのだ。

労働者に対するギッシングの考えは、たとえば『ライクロフト』では、「私は民衆の味方ではない。彼らはときとして嫌悪の情を抱かせる」¹⁰ と

述べられている。『ネザー・ワールド』の語り手は、労働者階級は「人生の意義など一切考えぬ人々」(2章11)であると言い、彼らの傲慢さについて「あらゆる傲慢さの中で最も目に余るものは、最下層の貧民が当然の権利と思う慈善を受けるときの態度だ」(28章253)と述べている。

労働者階級にこのような嫌悪感を持つギッシングの手にかかると、描き出される下層社会は限りなく暗い。『ネザー・ワールド』全編を通して、ユーモアを感じさせるところはほとんどない。毎日の生活に苦しみながら生きている人間ばかりが登場する。

実際には19世紀末ロンドンの下層階級の人々が、みなこのような重苦しい生活をしていたとは考えられない。たとえばジャック・ロンドン(Jack London)が『どん底の人々』(*The People of the Abyss*, 1903)で描いた下層階級の人々は、『ネザー・ワールド』の人物たちよりさらに下であるにもかかわらず、まだ生きる力を持っているように思える。¹¹⁾

また、小説の題材として下層社会を選んだからといって、その内容が暗いものになるとは限らない。たとえばディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)はよく知られているように下層階級を好んで描いたが、そのような作品の中でも彼は常にユーモアを忘れない。債務者監獄や救貧院にはいった人間を描いたときもそうである。一方、『ネザー・ワールド』にでてくる人物は、「救貧院にだけは入りたくない」と思っている人々であるから、その意味ではディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』(*Oliver Twist*, 1837)や『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1857)の主人公たちほど下層階級ではない。しかし『ネザー・ワールド』の人物たちは深い絶望感にとらわれている。これはギッシング個人の労働者に対する見方が大いに影響していると思われる。

批評家のスウィナートン(Swinerton)は、ギッシングの労働者観について、つぎのように述べている。

英国の貧民は死ぬ間際まで冗談を言う。このことはギッシングにも理解でき、称賛することもできたであろう。彼のとうてい理解できなかったことは、彼らが生きている間も冗談を言うことであった。彼らは汚いものや飢えについても冗談を飛ばしていた。彼らについて同情

的にものを書こうとしたら、あまり潔癖ではいけないのだ。¹²⁾

労働者たちが実際は陽気に冗談を言い合っていたとしても、ギッシングの目にはそれが写らない。彼のとらえた労働者の現実、それが真実かどうかは別として、光のない、笑いのないどん底なのである。

『ネザー・ワールド』のエピグラフに、「汚い物を描く場合、そこから美しい花が咲きだすならば描いてもよいだろう。さもなければ、汚い物は嫌悪されるのみだ」というフランス人の宗教史学者ルナン (Ernest Renan) の言葉が書いてある。作品に即して言えば、「美しい花」とはシドニーであり、ジェインであろう。精神的貴族であったギッシングにとって価値のあるのはこういう人物たちであり、彼はそれ以外は「嫌悪されるのみだ」と考えていたのだ。

ギッシングの労働者観は、シドニーの中に色濃く投影されている。労働者に嫌悪感を持ち、彼らを「価値のない連中」と見なすシドニーが、労働者たちとの連帯を目指しているのは矛盾であり、実際に心から連帯できるかどうかは疑問である。

IV

『ネザー・ワールド』の結末で、シドニーとジェインの生き方を語り手はこう述べる。

二人の生活で、祝うべきことはほとんどない。シドニーの若いときの夢は挫折した。芸術家にも、正義を求める戦いの指導者にもなれなかった。ジェインも、すばらしい模範になって社会の救済者になることもなく、人々を援助するために託された富を持つ、人々につくす女性にもならなかった。しかし、それぞれに仕事は与えられた。目立たないが、正義と慈悲を愛する気持ちに励まされて、二人はより不幸な人々の味方になり、自分たちよりも弱い心の人々を慰めるのだ。二人が住む場所は、まったくの暗やみではない。確かに、悲しみが待ち受

け、あるいは自分たちが設けたささやかな目標にさえも到達するのに失敗することもあるだろう。しかし少なくとも、二人の人生は、どん底の地獄の世界にまで落ちぶれた人間が満ちている社会が示す粗暴な力に対する抗議となるだろう。(40章 391-92)

いわばこれがこの小説の結論であり、人は貧困の中にあっても「正義と慈悲を愛する気持ち」を失わず、人をどん底に落とすような社会の力に対する「抗議」となるような人生を歩め、というメッセージが読み取れる。しかしこれは理想論であり、多分に観念的である。そしてギッシング自身、このような人生からは一刻も早く抜け出たはずである。

小説では、シドニーは結婚後ますます生活が苦しくなり、その結果絵を描くことをやめる。やがて本を読むこともあきらめる。彼の関心は狭まり、生活の問題は「シリングとペンスの小銭であって、不幸にも決してポンドではない」(39章 374-75)。しかも生活が良い方向に向かう見込みはない。彼の人生が、どん底の社会に対する「抗議」となるようなものであったとしても、そこにどのような光が見いだせるのかは、ギッシングは語らなかった。あるいは語ることができなかったと言うほうが正しいかもしれない。

『ネザー・ワールド』を書きあげた後で、ギッシングは初めてあこがれのイタリアへ、そしてギリシャへと旅立つ。当時のギリシャ、ローマが、古典文学の舞台となった頃のものを多く残していたわけではないが、彼の夢は十分に満たされる。帰国後、彼はロンドンを離れ、ロンドンの労働者の生活に目を向けることはなくなる。ギリシャ、ローマ訪問後のギッシングについて、ウルフはこう述べている。

彼の生活は変化し、生活に関する意見も変化しつつあった。…醜いものだけが真実なのではなく、世の中には美の要素もある。…いずれにせよ、彼が将来書くことになる本の内容は、トティラ¹⁰の時代のローマであって、ヴィクトリア朝のイズリントンではなかった。¹⁰

ギッシングは、労働者に同情を持つと同時に嫌悪感を持つ、という矛盾を乗り越えることはなかった。結局『ネザー・ワールド』が、労働者を主題にした彼の最後の小説となったのである。

(1996年12月)

注

- 1) Virginia Woolf, *The Common Reader*, 2nd ser. (London: The Hogarth, 1932) 220.
- 2) たとえば批評家のスティーヴン・ギル (Stephen Gill) は、「ギッシングの労働者階級と都市の貧民を扱った小説の中で最高のものとして広く認められている」と述べている。Stephen Gill, introduction, *The Nether World*, by George Gissing (1889; Oxford: Oxford UP, 1992) vii.
- 3) *The Collected Letters of George Gissing*, eds. Paul F. Mattheisen, Arthur C. Young, and Pierre Coustillas, vol. 2 (Ohio: Ohio University P, 1991) 24.
- 4) *The Collected Letters of George Gissing*, vol. 1 (1990) 98.
- 5) George Gissing, *The Nether World* (1889; Oxford: Oxford UP, 1992). 以下、テキストからの引用は全てこの版により、章、ページ数は本文中のかっこ内に示した。なお、日本語訳は倉持三郎氏、倉持晴美氏共訳のものを参考にさせていただいた。
- 6) George Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft* (1903; London: Whitefriars, 1930) 133.
- 7) これは、『ライクロフト』で、ライクロフトが音楽に聞きほれるところを思い起こさせる。Ryecroft, 134-36.
- 8) *Ryecroft*, 132.
- 9) *Ryecroft*, 52.
- 10) *Ryecroft*, 41.
- 11) たとえば、救貧院に来る人々に関して、「彼らはしかたなく来るので

あるが、それが世の常と思っているのでくよくよしないのだ」と書かれている。

Jack London, *The People of the Abyss* (1903; Tokyo: Hon-No-Tomasha, 1989) 105. なおジャック・ロンドンがこの作品を書いたのは20世紀になってからであるが、世紀転換期ということで『ネザー・ワールド』の舞台(1880年代)と同時代と見なして良いと考える。

- 12) Frank Swinnerton, *George Gissing: A Critical Study*, 3rd ed. (New York: Kennikat Press, 1966) 79.
- 13) トティラ (Totila) は東ゴートの王。在位 541-52。彼の活躍が書かれているギボン (Edward Gibbon) の『ローマ帝国衰亡史』(*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776-88) は、ギッシングの愛読書の一つであった。
- 14) Woolf, 225.